

ルネサスが
SANYOに
選ばれた理由。

協力:  Microsoft Office

- 広告** [特集]世界をリードする心臓・血管医療 提供 東芝
広告 ◆オープン化粧品◆業務システム連携で在庫と物流コストが約30%減ー富士通
広告 講演内容がWebで!! 『内部統制とITフォーラム』ITの果たす役割とは? NIKKEI
広告 7月21日(金)SAPビジネス・シンポジウム'06 ジェフリー・ムーア来日講演決定

ビジネス:ネット時評(日経デジタルコアより)

更新:3月29日 07:00

パリと京都の新旧融合(中村 伊知哉)

過日、パリに赴いた。リュクサンブール公園にあるフランス上院でのイベントに出席するためだ。「新技術と地方民主主義」と題するフランス上院と自治体国際化協会の合同セミナーで、ITが地方行政をどう変えるのかがテーマだった。

その点、フランスよりも日本の方が取り組みは活発なようだ。日本政府は情報通信と地方自治を総務省という一つの役所が担当しており、行政責任も明確だ。かつて郵政省と自治省と総務庁が合併する案を決める担当だったので、異物を米粒でくっつけたと揶揄された省庁再編には私にも責任があるが、こと行政情報化に関しては、進まなきゃ恥と言える体制になっている。



■実務的なフランスの上院議員

私はフランス上院で講演するに当たり、大上段に構えてみた。カフェ談義に熱くなる彼ら好みの話をしてみた。

「ネットの普及で、一人勝ちの競争から多元的な共存へ。ハリウッド型の商業表現から、一人ひとりの表現力へ。そう、デジタルはアメリカが生んだ近代兵器でありながら、アメリカ的な機能主義・近代主義を超克する。現在のデジタル技術は3世紀後に何をもたらしているだろうか。いま国家観が問われている。フランスの取組みが気になる。インターネットやブロードバンドの遅れをどうとらえるのか。ミニテルや新幹線TGVやロケット産業で見せた国家主導のインフラ主義を維持するのか」

しかし、上院議員たちは、もうそんな議論には関心がない、実践あるのみだ、とばかり、きわめて実務的な討論に終始した。おらが村の役場の情報を住民に公開したり、特産品のアイテムを全欧州に提供したりするテクニカルな事例のやりとりが相次いだ。

足元の、ローカルの活性化のために、いかにITを活用するかにみな熱心で、しかも長老たちがみな技術に詳しく、こちらが舌を巻くほどだ。「昔からの確立されたアナログな仕事があって、それをどうデジタルで活性化するかなんだよ。デジタルありきじゃないんだよ」とのたまう。「デジタルがやっと使いものになってきたから、使うだけなんだよ」

■アナログとデジタル結合狙う京都

今年はじめにユーロ紙幣が導入されて、3日もしたらすっかり財布の中身が新しいお札に変わっていたとパリの知人が言っていた。頑迷固陋なフランス人だが、古い土台の上に新しいモノを混乱もなく吸収していく力を持ち合わせているのかもしれない。

その少し前、京都にいた。京都西陣町家スタジオを見学した。町家と呼ばれる古い様式の西陣家屋を改装し、コンピューターを配備して、スタジオにするプロジェクトだ。京都府や京都造形芸術大学らが中心となって作った、アーテ

イストたちがコンテンツを創造するブロードバンド基地である。

古いものと新しいものを激突させ、アナログとデジタルを結合させて、新しいエネルギーを静かに育む場にしようというのだ。私も手伝うことにした。

そこはたまたま母の実家の近所なので、ついでに母の友人の和服屋を訪れた。和服屋といっても普通の民家で、畳にいくつか反物を広げて選ぶ。でも、和服を仕立てようとしても、その家だけで用事は済まない。帯屋さん。下駄屋さん。羽織のヒモ屋さん。近所のオジサンがゾロゾロやってくる。みな専門職で、きっちり分業されている。

茶菓子をいただきながら、オジサンたちに話をうかがった。デジタルの波はここにも押し寄せている。古来の紋様や色づかいを活かしたネクタイやスカーフを作ったり、製造工程にコンピューターを導入してコストダウンを図ったりする人もいるという。でも、基本はまだまだ圧倒的なアナログの世界で、匠が役立つ道具をそれとなく導入するだけ、という感じである。

■デジタルの千年の知恵やモデル

オジサンたちはぼやく。「いや、ほんま不景気でっせ」「さっぱワヤでっせ」「みんなヒマで、じっとしてまんねん」だが、目は笑っていて、みなどこか幸せそうだ。

西陣の旦那たちは、景気のいいときは、祇園に繰り出すそうだ。でも、その程度なのだそうだ。いいときに売れた分を貯めておいて、悪いときにはじっとして取り崩す。大きくなったり小さくなったりすることなく、ずっと同じことを数百年続けるモデルだ。

チャンスがうかがって業容を拡張したり、M&Aで事業規模を拡大したりすることもなく、まずくなってリストラすることもなく、シェア1位を目指したり5年で上場を果たそうとしたりすることもない。さっぱワヤでっせ。ぶつぶつ言いながら、みんなで分け合って千年生きる。

アナログの千年が終わって、デジタルの千年が始まる。でも、その千年は、アメリカ型の進化主義でつき進んでいくとは思えない。その知恵やモデルは、世界中の身の回りに転がっているにちがいない。

-筆者紹介-

中村 伊知哉(なかむら いちや)
スタンフォード日本センター研究所長



略歴

1961年生まれ、京都市出身。京都大学経済学部卒。在学中はロックバンド“少年ナイフ”のディレクターなどを務める。84年郵政省入省。電気通信局、放送行政局、登別郵便局長を経て、通信政策局でマルチメディア政策、インターネット政策を推進。93年からパリに駐在し、95年に帰国後は官房総務課で規制緩和、省庁再編に従事。98年郵政省を退官し、(株)CSK特別顧問に就くとともに渡米、MITメディアラボ客員教授に就任。2002年9月から現職を兼務。経済産業研究所コンサルティングフェロー、(社)音楽制作者連盟顧問、NPO「CANVAS」副理事長を兼務。著書に『インターネット、自由を我等に』(アスキー出版局)、『デジタルのおもちゃ箱』(NTT出版)など。